



SGH 事業推進のための教職員臨時加配の継続	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
校内に SGH 推進機構を置くことへの支援	○	○										
教育課程研究開発支援						○	○	○	○	○	○	○
AL の手法を用いた PBL 型授業や教科指導力向上のための教員研修支援	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
教員海外派遣研修支援・大学院派遣支援	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
SGH 研究成果発表会・全国高校生フォーラムへの支援・参画										○	○	
海外大学、海外中高、グローバル企業、研究機関などさまざまな提携先の紹介	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
SGH 事業推進に向けた大学教員の派遣および PBL 型授業や研究への支援			○							○	○	
NPO や海外大学入学センターと連携した海外進学希望者の支援				○	○			○	○			○
提携大学を活用した高校生留学プログラム（ギャップイヤー短期・中期留学プログラムの実施）									○	○	○	○
英語トップアッププログラム実施				○	○				○	○		
SGH 成果普及支援	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
関係各機関との調整	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
SGH 運営指導委員会			○							○		

(2) 実績の説明

学校法人立命館一貫教育部や部内の教育研究・研修センターおよび総合企画部国際連携課、立命館大学国際部、広報課、キャリアセンター、立命館アジア太平洋大学（APU）との連携や協力のもと、以下の項目に取り組んだ。

・SGH 事業推進のための教職員臨時加配の継続

⇒平成 30 年度以降の教員定数を策定するうえで SGH 推進体制に留意し、国際化推進のための加配を継続して行った（1 名）。

・校内に SGH 推進機構を置くことへの支援

⇒立命館慶祥中高においては、研究部主任を SGH 担当として配置し、担当授業時間についても可能な限り配慮した。

・教育課程研究開発支援

⇒SGH の取組をより効果的にするために、教育課程の編成において各種助言を行った。

・アクティブ・ラーニングの手法を用いた PBL 型授業や教科指導力向上のための教員研修支援

⇒立命館一貫教育部に置いた「附属校教育研究・研修センター」の主催で、新任研修（年間 10 回）や教科別研修、ミドルリーダー研修などを幅広く実施し、優れた教育実践や理論、取組みから学ぶ機会を提供した。教員は、これらの機会を通して、指導力向上に資する最新の指導法や、アクティブ・ラーニングの手法を用いた PBL 型授業等について知識を深めることができた。

・教員海外派遣研修・立命館大学教職大学院派遣支援

⇒教員が年間で海外や大学院で研修に専念できるよう規程整備を行った。英語科以外の教員が英語力とともにグローバルコンピテンシーを獲得できるように短期（4 週間以内）海外研修を一貫教育部の予算で継続して実施し、立命館慶祥高校からは 2 名の教員がアイルランドの DCU とイタリアのマルタで研修を実施した。また、最新の教育理論について学び、教科指導力の向上を目

的とした立命館大学教職大学院での有給研修（2年間）を新たに開始し、立命館慶祥中高から2名の教員が参加した。

・研究成果発表会、全国高校生フォーラムへの支援ならびに参画

⇒2月16日（土）に立命館慶祥中高で開催されたSGH課題研究発表会の実施に関連して、立命館大学の広報課等と連携し支援した。また、12月15日（土）に東京国際フォーラムで実施された文部科学省主催「SGH全国高校生フォーラム」を始めとする企画について支援し参画した。当日は、146校（123校SGH指定校、アソシエイト校など含む）が発表参加を行いその中で、立命館慶祥高校は、文部科学大臣賞を受賞し全国1位となった。

・海外大学、海外中高、グローバル企業、研究機関などさまざまな提携先の紹介

⇒立命館大学国際入学課、国際連携課と協働し、海外校の受入などをコーディネートした。

・SGH事業推進に向けた大学教員の派遣およびPBL型授業や研究への支援

・海外大学進学者が結成したNPOや海外大学入学センターと連携した海外進学希望者支援

⇒ハーバード大学やMITなどに進学した日本人学生が中心となって結成したNPO（留学フェロウシップ）やカナダのブリティッシュ・コロンビア大学（UBC）の入学センター等と連携し、海外大学への進学や留学を希望している生徒へのワークショップを実施した。

・提携大学を活用した高校生留学プログラム、特にギャップイヤー留学の実施

⇒English Intensive Programを、高3の1月から3月にかけて立命館大学の学生交換協定大学でもあり立命館がオフィスを置くカナダのUBCで実施。立命館慶祥高校から4名が参加した。また、UBCと同様に立命館大学と学生交換協定を結ぶアイルランドのダブリン・シティ大学でも、1月から4週間の英語集中プログラムを実施し、同校から11名が参加した。両プログラムともSGHでの学びを経た生徒が多数参加し、英語力の伸長のみならず人間的成長に大きく寄与した。

・英語トップアッププログラムの実施

⇒学校法人立命館一貫教育部が主宰し、立命館附属校に所属する生徒（英語上位者）を対象に、英語力の一層の向上を目的として、株式会社NOVAと共同でTOEFL iBT®テスト対策講座を夏季と冬季に集中して実施した。

・SGH成果普及支援

⇒立命館大学広報課の協力を得て、立命館大学とAPUのSGU関連ホームページ（[http://www.ritsumei.ac.jp/international/global\\_initiative/](http://www.ritsumei.ac.jp/international/global_initiative/)）に、立命館附属校のSGH研究開発に関するリンクを貼り、SGH成果普及への一助とした。

・関係各機関との調整

⇒学校法人立命館一貫教育部が主管となり、文部科学省や大学、外部団体への問い合わせや相談をはじめ、さまざまな折衝・調整を行った。

・SGH運営指導委員会

メンバー：学内推進委員（上記）を事務局とし以下のメンバー

本田 優子 札幌大学教授

八木 英雄 (株)電通北海道プランニング・クリエイティブ局次長

兼クリエイティブ部長 シニアクリエイティブディレクター

藤澤 義博 日本航空(株) 路線統括本部 マイレージ事業部マネージャー

安藤 茂 加森観光株式会社 営業本部長

内 容：実施状況報告・効果検証・今後の計画へのアドバイス等

⇒今年度は、6月と2月の2回に実施。貴重なご指導・ご助言をいただいた。

## 6 研究開発の実績

### (1) 実施日程

業務項目	実施期間（契約日 ～31年3月31日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①通常授業での人材育成	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
②高1 アイヌ学習											○	
③高2 GA 講座	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
④高2 海外研修：事前事後学習、現地活動、報告会			○	○	○	○	○	○	○	○		
⑤ボーダー・ツーリズム学習	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
⑥十勝研修									○			
⑦サハリン研修						○						
⑧アイヌ文化学習	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
⑨NZ 研修								○				
⑩アイヌ研修							○				○	
⑪APU との高大連携講座				○	○	○	○	○				
⑫APU 学生団体との交流			○									
⑬タイ研修						○						
⑭SGH 課題研究発表会											○	
⑮中学での取組	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑯TOEFL-ITP 受験	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	
⑰留学生・訪問者受け入れ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑱ハーバード・MIT 研修											○	

### (2) 実績の説明

#### ・高校1年生「地域研究」（対象生徒数：333名）

- ①通常授業を通して、今後の学習に必要な探究心・情報収集の知識・発想力を身に付けた。
- ②アイヌ学習：12月に行われたSGH全国高校生フォーラムにて文部科学大臣賞を獲得した3年生4名によるアイヌのポスター発表と、1年間のアイヌ学習の発表を行った。アイヌの知識を身に付けるだけでなく、先輩の発表技術や英語力の高さを実感でき、さらにアイヌに対する興味・関心を持つ機会となった。（事後アンケート：84%が「関心が高まった」と回答。）

#### ・高校2年生「海外文化研究」（対象生徒数：303名）

今年度は統一テーマ「20年後の自分」を基に各コースが目的・獲得目標を設定した。このことにより、全生徒が統一された意識の下、事前学習から学習・活動に取り組むことができた。また、海外文化研究の学びを深めるため特別講座「Global Awareness」では、国際的な視点や新たな価値観・考えを獲得でき、そして異文化に対する興味・関心を喚起できた。

#### ・高校3年生「特設講座（観光開発・国際社会・アジア学）」（対象生徒数：65名）

**観光開発**：今年度は、「食を通じたインバウンド観光の推進」をテーマとし、これまで余り拡大できていない「ロシア及びムスリム地域からの観光客誘致の拡大」を模索した。昨年の反省をふまえ、「年度末の報告会での提言策定」を一年間の目標としてかけ、講座特別講師であるJTB北海道のスタッフの協力のもと研究を進め、一連の課題・製作物・プレゼンテーションなどの作業に取り組ませた。また、サハリン研修・十勝研修も同様のテーマに基づいた内容で組み、研究を深化させた。授業の最後には、校外関係者を招いた発表会を実施した。

**国際社会**：「アイヌ語の継承」をテーマとし1年間取り組んだ。政府関係者や博物館学芸員等の

アイヌの専門家にもご協力いただき、歴史としてではなく、「今取り組むべき課題」としてアイヌを捉えさせた。「アイヌ語学習」は平取町立二風谷アイヌ博物館の関根健司氏に実施していただき、単にアイヌ語を学ぶのではなく、どのように保護・継承できるのかのプランニングも同時に行った。アイヌ研修（平取町）と NZ 研修もこの観点から実施した。講義の最終日は、地域の新聞社の方を招き、生徒が考えたアイヌ語継承のプランの発表会を行った。

**アジア学**：昨年度、発表の回数を増やしたことを継続し、東南アジアをフィールドとした様々なトピックについてのグループ・ペア・個人の発表を行った。なかでも、立命館アジア太平洋大学の教授 3 名による高大連携講座は大学の教授に評価をしていただくことができ、生徒の自信にもつながった。

#### ・SGH 国内・海外研修

**サハリン・十勝研修**：観光開発講座の「実習」として、ロシア共和国サハリン州ユジノサハリンスクと、国内では北海道・十勝観光の拠点帯広市を訪問し、実地での地域調査の手法と情報の整理術、提言方法を学んだ。「食を通じたインバウンド観光の推進」をキーワードとし、北海道・サハリン両地の観光資源発掘・整理・魅力の発信及び観光プランニングを模索し、日本及び北海道への外国人観光客の誘致のための具体的な方策やその政策提言、ならびに現地での実地調査の中でインタビュー調査や学校交流を行った。

**アイヌ研修**：今年度は 2 つの研修を実施した。一つは国際社会受講生徒（高 3・17 名）を対象としたものである。アイヌ住民が多い平取町を訪れ、アイヌ語学習の講師である関根健司氏が二風谷小学校で行っている特別授業に参加し、平取町立二風谷アイヌ博物館で関根氏からレクチャーを受け、平取高校に留学中の NZ からのマオリ留学生等と交流した。この研修は、講義で学ぶアイヌ語やアイヌ文化を尊重する気風を生徒にもたらす良い機会となった。もう一つの研修は、次年度の国際社会受講生徒（高 2・27 名）を、アイヌ学習の第一歩として北海道博物館へ連れて行った。学芸員による特別レクチャーを初めに行うことで展示見学が有意義なものとなり、次年度へ向け、アイヌ文化への関心を高めることができた。

**NZ 研修**：昨年度から引き続き、NZ (Auckland と Whakatane) を研修先とし、「マオリとの共生を学ぶ」をテーマに実施した。今年度は学校でどのようにマオリ文化を学習しているのかを知るため、現地校のマオリプログラムへの参加を主な活動とした。現地生徒と共にマオリ文化を学ぶ経験を通して、NZ の先住民族文化継承の様子を具体的に知ることができ、翻って日本のアイヌ政策を考える機会となった。この研修とアイヌ研修（平取町）での学びは、SGH 全国高校生フォーラムの発表に活用された。

**タイ研修**：山岳民族が複数共存する北タイ (Phayao 県) を研修先とし、多文化共生にかかせない「教育とリーダー育成」をテーマに実施した。北海道も日本においては地方にあたり、実際の経済活動に根ざしたタイの地方の教育施策 (ex. 対中政策が政治・経済の両面において重要であることから中国語を必修している) を目の当たりにし、海外展開を見据えた教育の在り方などを考えることができた。また、YMCA Phayao Center での活動や村でのホームステイを通して現地の実情を知り、多くのことを体験することができた。

#### ・SGH 課題研究発表会

高 3 の課題研究 3 講座の学習と国内・海外研修の経験をまとめたものと、高 2 海外研修のリトアニア・ポーランドコース、そして課題研究論文優秀者 2 名の発表を行った。運営・司会は高 3 が行い、聴衆者は高 2 の次年度の課題研究選択者及び運営指導委員メンバー・他校からの教員 (7 名) と他団体からの 5 名であった。

## ・課題研究以外の取組

高校での教育を見据え、中学でも学習・講演・研修を実施した。また、留学生を多数受け入れ、266名の訪問・交流があった。

## 7 目標の進捗状況、成果、評価

最初に、平成29年度の完了報告書「8 次年度以降の課題及び改善点」で示した4項目を、今年度、どのように実施・改善したのかについて述べる。

### ①地域の学校との連携構築

この課題は、中間評価で「学校法人内の連携がよく図られているが、今後は地域の学校との連携をより緊密にし、成果普及を強化することが望まれる。」と指摘された課題である。今年度は、アイヌ文化学習において、すでに自治体として取り組んでいる北海道日高地方の平取町にある二風谷小学校と、NZからマオリの留学生を受け入れている平取高校との連携を模索した。今年度は訪問・交流を行ったが、次年度は連携の強化を図りたい。

### ②成果普及の強化

昨年度は定期試験直前のため参加できなかったSGH全国高校生フォーラムにおいて、本校の課題研究テーマの一つである「アイヌ文化の継承」について発表を行い、文部科学大臣賞を受賞した。本校の成果の普及の大きな機会となった。またこの受賞の影響か、2月に行われた課題研究発表会にも他校や他団体の方にご来校していただき、本校の課題研究を広く知ってもらえた。

### ③課題研究の進化・深化

国内・海外研修共により課題研究を進化させることを目的として、行き先・内容を改善させることができた。また、授業内での発表の回数を多く設定し、さらには聴衆者・評価者として大学教授や校外の方にご協力いただくことができた。

### ④英語の強化

TOEFL-ITP®スコアは以下のとおりである。

	受験総数	平均	480点以上	500点以上	最高点
高2	300名	426.70点	29名	20名	660点
高3	301名	441.29点	47名	24名	643点

昨年度と比較すると、高3の平均点は10点ほど上昇し、550点以上の生徒も8名増加した。高2については、500点以上が2名増加し、最高点も17点上昇した。

次に、今年度の課題研究論文の成果を記す。本校では最終的に1万字の論文を内部進学者（文系）に執筆させるが、前期終了時点で外部の懸賞論文にも応募する。今年度は11名が受賞した。以下がその一覧である。

#### ●中央大学 第18回高校生地球環境論文賞

入選 中西さくら 【エコポロントで札幌を守る】

#### ●公益財団法人青雲塾 第10回青雲塾・中曽根康弘賞（応募総数162点）

佳作 和田健輔 【北海道広尾町が日本の未来を救う 地方が活性化する処方箋】

#### ●旺文社 第61回全国学芸サイエンスコンクール（人文社会科学研究部門 応募総数634点）

入選 長崎ななみ 【ステップ・バイ・献血】

入選	新田智華	【DIET で子どもを救う】
入選	吉田梨緒	【厚別アスリート塾@レストラン RIO】によるジュニアアスリートの「食事改革」は可能か】
●	公益財団法人	公共政策調査会平成 30 年度懸賞論文（応募総数 55 点）
入選	山澤結以	【リラセラルーム」を設けることで中学生・高校生のストレスを軽減できるか】
●	NRI（野村総合研究所）	学生小論文コンテスト 2018 高校生の部（応募総数 1,444 点）
メインテーマ：「2030 年の未来社会を創るイノベーションとは ～世界に示す日本の底力！～」		
優秀賞	松賀翔佑	【“マナビ介護”による介護うつへの減少は可能か】
特別審査委員賞	岸本万尋	【根室とロシアの合同大学設立に向けて】
奨励賞	小河桃子	【医師も患者も安心できる旅立ちを】
奨励賞	佐藤笑太	【W 担任制度～晴れの国おかやまの次世代教育改革～】
奨励賞	芳賀雪奈	【おいでヨ！ながぬまプロジェクト】

次に生徒の意識の変化を見る。測定方法はアンケートである。このアンケートは、大阪教育大学科学教育センターの特任准教授である仲矢史雄先生にご協力いただき、前期と後期の 2 回、「国際交流への認識」というタイトルで実施した。国際交流についての質問が主なものであったため、高校 2 年と 3 年の生徒を対象とした。アンケート結果は以下のとおりである。

	前期	後期	差
1 国際理解に関する個人的価値	84.1%	83.6%	↓0.5%
2 国際理解学習における自己認識	39.3%	44.6%	↑5.3%
3 国際理解の楽しさ	65.2%	69.3%	↑4.1%
4 国際理解に対する道具的な動機づけ	65.5%	69.4%	↑3.9%
5 国際理解に関する全般的な興味・関心	72.1%	77.1%	↑5.0%
6 世界連帯意識	74.4%	76.8%	↑2.4%
7 国際理解における自己効力感	59.5%	64.2%	↑4.7%
8 他国文化の理解	66.8%	69.1%	↑2.3%
9 人権の尊重	75.5%	77.3%	↑1.8%
10 外国語の理解	58.1%	61.8%	↑3.7%

【仲矢先生による分析からの考察】

- ・前期後期の比較をすると、10 項目中 9 項目で肯定的な認識が過半数を超えており、学校全体として国際理解の取り組みに対し生徒は意義を感じ、取り組んでいることが示唆される
- ・注目すべき変化は項目 4（国際理解に対する道具的な動機づけ）の向上である。この項目は、自分の将来において国際理解に関する学習が有意義であると認識していることを反映しており、学校全体として生徒たちが国際理解に関する学習に主体的に取り組む、かつその状況が向上していることを示唆している。

次に、Benesse が実施している GPS-Academic®を客観的評価の結果・分析を記す。受験生徒は内部進学文系生徒（高 3・92 名）である。（高校 2 年 116 名も受験をしたが、2 月実施のため結果が未着である。）

	批判的思考力					協働的思考力					創造的思考力				
高3	S	A	B	C	D	S	A	B	C	D	S	A	B	C	D
2018	0	21	65	6	0	0	15	58	19	0	3	32	53	4	0
高2	S	A	B	C	D	S	A	B	C	D	S	A	B	C	D
2017	0	9	55	15	1	0	17	50	13	0	0	23	42	14	1

(数値は人数。テストについては [https://www.benesse-i-career.co.jp/univ/assessment/pdf/gps\\_academic.pdf](https://www.benesse-i-career.co.jp/univ/assessment/pdf/gps_academic.pdf) を参照)

現高3の昨年の成績と比較すると、若干ではあるが高3の方が数値が高く、2つ以上の思考力で「A」評価となった生徒の人数も多い(高3:18名、高2:14)。より詳細に結果を見ると、「創造的思考力」が大きく伸びた。これは課題研究や論文執筆を通して、主観的に問題を捉え、その解決策をそれぞれ独自に考える学習を積んだ成果と言える。また、このテストは社会人も対象となるものであるが、「S」評価が出ることは稀なことであり、創造的思考力において3名の生徒が獲得したことは大きな成果である。(昨年度の高3は1名。)

最後に目標の進捗状況について記す。概ね予定通りに進めることができている。残されたものは「英語力」と「国際シンポジウム開催」となっている。当初の予算から大幅に減額されている現状から、後者の「国際シンポジウム開催」は困難であるが、「英語力」の実現へ向けては次年度も進める。

## 8 次年度以降の課題及び改善点

### ①地域の学校との連携構築

再来年度のSGH指定終了後も課題研究を継続するため、北海道十勝地方の平取町の学校との連携を強化する。

### ②成果普及の強化

これまでに引き続き、講座単位での外部向け発表を続けつつ、校外で行われる企画でも参加可能なものは挑戦する。また、最終のSGH課題研究発表会に校外からの参加者が多く参加できるよう工夫を図る。

### ③英語の強化

昨年度の課題・改善点でクリアできなかった「課題研究論文執筆の際の英語論文の活用」や「英語のsummaryの作成」について、IR(国際関係)コースの生徒で実現できるよう方策を練る。

### ④課題研究の教材開発の完成

指定終了後を見据え、1年間の指導内容・方法等を明確化し、教材開発を完成させる。

#### 【担当者】

担当課	立命館慶祥中学校・高等学校	TEL	011-381-8888
氏名	江川 順一	FAX	011-381-8892
職名	副校長	e-mail	egawa@spc.ritsumei.ac.jp